



Title	国際人新渡戸稲造と英米文学
Author(s)	長尾, 輝彦; NAGAO, Teruhiko
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 120, 右185-右204
Issue Date	2006-11-24
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/16885">https://hdl.handle.net/2115/16885</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	CulturalScience120-r6.pdf



## 国際人新渡戸稲造と英米文学

長 尾 輝 彦

博識をもつて知られる新渡戸稲造において、とりわけ英文学の知識が中心的な位置を占めていたという事実を指摘するのが本稿の目的である。「太平洋の橋になりたい」という有名な言葉はもともと若い頃に、専門の他に英文学を学びたいのはなぜかと問われたときの答えである。『ジュネーブのあやまちは何故か』と題した最晩年の講演でも、本業の方はいろいろ変わったが、副業ともいうべき英文学への関心は変わらなかつたと述懐している。<sup>(注1)</sup>

このような事実にもかかわらず、従来の新渡戸研究においては、英文学の分野からの貢献は比較的少なかつた。それには三つの理由が考えられる。第一は、新渡戸が英文学と言うとき、現在我々が考える英文学よりもっと広い範囲をカバーしていた。フィクションとしての文学だけでなく、歴史や哲学、宗教にも及び、マシュー・アーノルドの言葉を言えば「世界で考えられそつて言われた最高の思想」を意味していた。第二は、トーマス・カーライルの信奉者として、彼は、人生の目的は行動であり思索ではないという信念を持っていた。彼が文学に向かつたのは、評論や論文を書く文学研究者の態度ではなく、書物の知識を実践に生かそうとする人の態度であつた。そしてこれが第三の理

由につながる。書物の知識は実践されねばならない。この結果、知識自体は背景に退き、最後まで副業でありつづけ、あくまでも行為が優先しそれが本業を形成することになった。

この三つの要因——広義の文学であったこと、書くことよりも行為が優先されたこと、そして文学は副業と位置づけられたこと——が、新渡戸が優れた英文学者であった事実を見えなくしていた。

ビクトリア市(注2)は新渡戸終焉の地となったが、札幌は新渡戸の知的目覚めの地であった(注3)。そして札幌での学友内村鑑三は、『余は如何にして基督信徒となりし乎』のなかで、新渡戸の傾向が当時きわめて文学的であったことを書いている。

英文学の中心的な作家であるシェークスピアのテキストは、新渡戸の頭にまるでコンピューターのように記憶されていた。新渡戸が英語で書いた書き物はシェークスピアへの言及が満ち満ちている。『武士道』などもあたかもシェークスピアの語句の玉手箱であるかのような感がある。しかも当時の文学研究者がそうであったように、新渡戸もいちいち出典を示したりしないことが多い。『武士道』の日本語訳を手がけた人たちが時としてシェークスピアへの言及に気がつかなかったりするのもそのためである(注4)。

『国際連盟は何をなしつあるか』と題した講演は、新渡戸の生涯のクライマックスと言ってもよいほどに、重要な講演である(注5)。国際連盟は正式には、ベルサイユ条約に従って一九二〇年一月に発足したが、連盟の事務局はその前年の夏から、ロンドンで準備を開始していた。フランスやイタリアの事務次長が人選等で手間取っているときに、新渡戸はロンドンにあって、事務局総長に任命されたエリック・ドラモンドを全面的に補佐していた。

発足をひかえた国際連盟に、様々な反対や冷笑、懐疑が向けられていたときに、連盟の理念を世界に向かって訴え

ることがこのほか必要であった。そして新渡戸は、連盟を代表してその理念を、英国及びヨーロッパ各地で説明してまわるといふ仕事を引き受けることになっていく。それが上述の講演となったのである。この種の講演は各地で何度か行われたようであるが、上述の講演は一九二〇年九月十三—十四日ブリュッセルの国際大学で行われた。そのときまでにすでに連盟はいくつかの国際問題を処理していた。その一つはポーランドで流行した伝染病である。戦争で荒廃したポーランドでチフスが流行し、国際的な援助が是非とも必要であった。連盟は二百万ポンドもの資金を様々な国から募った。このことを新渡戸は次のように誇らしげに語っている。

これは壮大な博愛主義の事業であります。伝染病の危険から遠く離れた国々から、巨額の資金を集めなくてはならないとき、できることはただ、その国々の寛大な心に訴えるしかないのです。このような博愛的な事業に参加することによって、連盟の仕事には、「全世界を、一つの親族にするような人間性の発露」が加えられるのです。

ここで引用の出典は明記されていないが、これはシェークスピア『トロイラスとクレシダ』からの引用である。シェークスピアの研究者であれば、これがシェークスピアの作品の中でもっとも難解な作品であることは誰しも認めるであろう。しかも誰もが簡単に思い出せるような特別印象的な場面に出てくる台詞というわけでもない。しかし一方、このときの新渡戸が緊急な課題——新たに設立されたこの国際機関のあるべき姿を定義するという課題——に取り組んでいたことを考えるなら、その引用は彼の記憶の中から自然に出てきたものだと思わざるを得ない。シェークスピアの全集を広げて、どこかにしやれた言葉はないかと探したなどということは想像できない。

文学作品からの引用はシェークスピアに限らない。私がつとも印象的だと思うものは、一九三三年に東京パンパシフィック倶楽部の昼食会で行った講演の中に出てくる。題は『ジュネーブのあやまちは何故か』<sup>(注6)</sup>で、ここで新渡戸は、満州事変についての国際連盟の調査が十分なものでなかったことに遺憾の意を表明する。同時に、日本が世界に向かつて自らの立場を説明しなかつたことを悔やむ。ともあれ、日本は、新渡戸が情熱を傾けた国際連盟から脱退した。新渡戸は言う。

日本は連盟を脱退しました。ここで言わせてもらえるなら、私は、日本が脱退したのは現時点ではやむを得なかつたと思います、が同時にまた、国際連盟は世界の未来にとって最大の希望であることは変わらないと信じてやまないのです。つまり私は、自己矛盾した一貫性のない人間だということです。連盟が人類の達成した最大の成果であると信じる心は変わりません。だから、日本が脱退せざるを得なかつたことを残念に思います。

世界は今暗闇に向かつて進んでいる。しかしそれでも、彼は、このように多くの国の人たちと話し、世界の未来の平和について語る事ができることをうれしく思う。彼はこの講演を次のように結んだ。

このように皆様の前で挨拶できる機会を与えてくださいましたことを感謝申し上げます。この倶楽部が今後その重要さと影響力をさらに高めていくことを願うものであります。私たちは夜の闇の中で行き交う船のように出会いました。でも、夜の闇の中で出会った船は忘れがたいものではないでしょうか。

引用符はないが、最後の文章は、ロングフェロウの詩句をさりげなくふまえているもののように思われる。さりげないので、気がつく人は少ないかもしれない。しかしそのさりげなさゆえに一段と情感が伝わってくる。ロングフェロウの詩は次の一節である。

夜の海で出会い、通りすがりに声をかけ合う船、

つかの間の出会い。信号燈が照らされ、暗闇の中、声は遠のく。

それに似て、この人生の海原で、我々は出会い、声をかけ合う。

ただ目を合わせ声をかけるだけ。後にはまた暗闇と沈黙。

（『街道の旅籠Ⅲ・エリザベスⅣ』一一四）

この一節が思い起こされるなら、新渡戸の言葉は雄弁なメッセージになってくる。「私たちが出会うのにもっとふさわしいときがあつたかもしれない。今は、私たちは暗闇の中で出会っている。『夜の海で出会った船』のように。だがそれが人生だ。私たちにできることは多くないかもしれない。それでもそれを今ここですることがこの世での私たちの使命なのだろう。そうであるなら、この出会いを大切にしようではないか。私たちのこの出会いがいつの日か新しい世界に向かって、靈感を与える日がこないとは言えない。私たちの夢を実現するのに十分な光がさしてくる、来るべき時代に」と、そう新渡戸が語りかけているように思えてくる。（注）

このように、文学作品へのアリュージョンは新渡戸の英語の美しい装飾となっている。文学にはぐくまれた新渡戸

の英語には優雅さと美しさが備わっている。これが彼を、連盟の発足時に、連盟のスポークスマンたらしめたものである。<sup>(注8)</sup>日本人の新渡戸理解はこの点で不十分である。新渡戸の成功の秘訣は単に英語が達者だったからだと多くの人が考えがちである。英語をすらすらしゃべることと学識ゆたかな気品ある英語をしゃべることは別なのである。<sup>(注9)</sup>

もちろん文学の影響は文体の装飾にとどまらない。平和と愛の精神は、彼の中にあつて単なるイデオロギーではなく心の真実となっていたが、それは文学によって育まれたものではないかと思う。講演『国際連盟は何をなし何をなしつつあるか』の結びのところで、新渡戸は次のように言っている。

連盟にその使命を全うさせようではありませんか。連盟規約にうたわれた高邁な理念に導かれ、専門家たちの叡智に支えられ、開化した世論に後押しされて、連盟は、その創設と存在意義を正当化するような働きをするようになるでしょう。そしてやがては、詩人や哲学者たちが思い描いた、より高次の世界的組織がこの連盟を継承して、この世界に恒久的な正義と平和を実現するときに来るのです。(傍線付加)

「詩人や哲学者たちが思い描いた」と新渡戸は言う。ここで思い出すべきは、正義と平和、とりわけ平和は、偉大な文学が送る永遠のメッセージであったことである。トロイ戦争を描くホメロスの『イリアド』も、平和と和解を訴える象徴的な一節で締めくくられている。同じことは、英軍がアジンコートで仏軍を破るといふ、国民感情を大いに高揚させる出来事を題材にしたシェークスピアの劇『ヘンリー五世』についても言える。

この点でもっとも重要なのは、トーマス・カーライルの影響であろう。すでに述べたように、札幌は新渡戸の知的

目覚めの地である。その地で彼はカーライルの書に出会い、そこに人生の指標となるものを見いだした。この若いときのエピソードを新渡戸は後年の回想で何度も述べている。ただし何年も前のことであれば当然のことながら、彼の回想は細かい点では正確でないところもあるが、学校の図書室で、あるアメリカの雑誌に引用されたカーライルの言葉に出会った。これが一八七九年秋のことであったことはおおむねわかっているが、新渡戸の伝記研究において、その雑誌の特定はまだできていないように思われる。

現在の北海道大学図書館は、新渡戸の時代の図書と雑誌を保存している。この資料を検索しあれこれ考えた結果、新渡戸が読んだのは、『ハーパーズ・ニュー・マンズリー誌』一八七四年四月号だったに違いないとの結論に達した。(注10)そこにはジェームズ・グラント・ウィルソンなる人がカーライルについて書いた記事が載っており、該当する一節は次のようなものである。

政治理論や実践哲学の分野では必ずしも信頼のおける指導者とは言えないかもしれないが、読者を鼓舞し新たな真理に目覚めさせるという点で、彼「カーライル」の価値はどれほど高く評価してもしすぎることはない。それは第一級の精神にのみ認められる力である。あのように読者の心を奮い立たせ光を与えるという力は、神業と言うほかないからである。彼の全盛期の教えに耳傾けた人たちが受けた恩恵——勇氣と誠意と自立の精神によって、どんな身分の低い者でも自身の中に崇高な能力を見いだすことができるのだということを教えてもらったその恩恵——は、まさに畏敬の念と感謝の心でもって返されるべきものである。知的靈感が引き出されるその源のところを清らかにしてくれる人という点で、彼の影響力はただ一人ワーズワースに及ばないだけである。あるいは、ワーズワ

スにも劣らないかもしれない。……〈中略〉…… 文学の名声にあこがれる一人の若者、しかしながら彼は生計のために小さい学校の教師として働かねばならない。その若者がそのことの愚痴と落胆を手紙でカーライルに訴えた。この手紙に、チェルシーの哲人「カーライル」は以下のごときすばらしい返答の手紙を書いたのである。一八五〇年十一月十七日付の手紙であり、私の知る限りでは、まだ活字になつて世に知らされたことがない。昨年の夏にイギリスにいる私の友人が原本から書き写してくれたものである。「察するにあなたは」とカーライルは書いている。「人並み外れた、いやひよつとしたら極端なほどに、繊細な感受性の持ち主で、今、自分が何をなすべきなのかわからない、そういう不幸な状況におかれた青年であるとお見受けしました。その結果、漠とした夢想、混沌とした瞑想、知り得ないものを知ろうとする無益な格闘、そういつたものがあなたをとらえている。そのような人格は、この世で何かをなすべきすぐれた能力を宿していることが多いものです。しかしそれはまた、しかるべき仕事に向けられないなら、人生行路において、必ずや、苦悩と失望と挫折を引き寄せずにはおかないものです。人間がこの世にあるその目的は、行為であつて、思索ではないのだということを肝に銘じておいてください。この世においてあなたになし得ることは何か、あなたが今いるその場所で、あなたの現時点の状況で、何をなし得るかということ、あなたの中にあるすべての力を傾けて確認してみてください。そしてこれと決めたら、その一事に向かつてあなたのすべての能力を向けてください。今ふけつていゝ夢想や感情や奇妙な思索や気分等々は、その一事に關わりその一事を達成するのを助けるものでない限り、全く何の値打ちもないものだと考えるようにしてください。そうすることによって初めて、今あなたを苦しめている思索や気分といったものは、あるものは正当なものとして残り、あなたにとつてかけがえのない所有物になりますし、またあるものは、意味のないものとして脱落し消えて

いくでしょう。そしてあなたの決めた目標は、あなたが勇氣を持ってそこに向かって進むなら、一步ごとに一段と明確なものになるのです。誰もこの宇宙を理解できた人はいません。しかしこの宇宙の中で、自分にできる立派な、人間らしい仕事は何か、それを理解することは各人にできることです。へ元氣を出せ。予測もしなかった勝利の手段(注七)というものがあるのだ」と、スコットランドの詩にあります。私が言いたいのはまさにそれです。」(傍線付加)

これが新渡戸の見た雑誌であると考える根拠については注におくるとして、ここでは、この雑誌論文の著者が「精神を純化してくれるという点で、ワーズワース以外の誰にも負けない」と言っている点に注目したい。このころ新渡戸は、ジョン・スチュアート・ミルの青春時代(注七)に似た精神的危機の状態にあつた。そしてミルがワーズワースの詩を読むことによつてその精神の危機を乗り越えようとしたごとく、新渡戸は、カーライルの書を読んで道を開こうとした。しかし農学校の図書館にカーライルの本は一冊もなく、また東京の本屋に行つても見つからなかつた。そしてその翌年、本国に帰ろうとしていた宣教師の家で偶然、カーライルの書『衣裳哲学』(一八三三―三四年)を見つけた。いったん手に入ると、新渡戸はその書をむさぼるように読んだ。三十回以上読みかえしたと彼は言う。そしてその書には、中ほどまで読み進んだところに、次のような、戦争を弾劾する有名な一節がある。

虚飾をはぎ取つた言葉で言つてみよう。戦争というものの趣旨と結果はいつたい何なのだ。仮に私自身の経験で言うなら、ここイギリスのダムドラッジ村に、たいてい五百人くらいの人が住んでいるとしよう。この五百人の中から、対仏戦争の折、フランス人の生来の敵と称する者たちがやつてきて、毎年三十人の体格のよい男たちを調達す

る。ダムドラッジ村は、自分のお金でこの者たちを養い育てたのだ。それだっているいろんな困難や悲しみの末にやつとの思いで養い成人させたのだ。いろんな職を身につけさせ、ある者は機織りをし、ある者は家を建て、ある者はハンマーで石を切り出す。どんなに力の弱い者だって三十貫位の重さに耐えられる。それなのにみんなが泣いたりわめいたりする中で選びだされ、赤い制服を着せられ、二千哩の先へ船で運ばれる。仮に南スペインということにしよう。輸送費は国もちだ。その地で必要なときが来るまで食料を与えられる。そして今この同じ南スペインに、同じようにフランスのダムドラッジ村から、三十人の同じようなフランスの職人たちがやってくる。やがて、大なる努力の末に、この二つのグループが対面することになる。三十人が三十人と向かい合う。すぐさま「撃て！」という号令がかかり、彼らは引き金を引いて、お互いの体から魂をふきとばす。そして、きびきびと動く有益な六十人の職人がいたところに、今や六十の死体が転がり、埋葬もせねばならない、涙も流さねばならないということになる。彼らはいさかいはしていたのか。いやいや、悪魔がどんなに忙しく立ち回ろうとも、この者たちの間にいさかいの種などみじんもなかった。遙か遠く離れて暮らしていて、一度だつて会ったことがないのだ。むしろ、この広い世界の中にあつて、通商というものを通じて、彼らの目には見えないところで、お互いが助け合うという関係にさえなっていたのだ。それがどうして？ 馬鹿なことではないか。彼らの統治者たちの間で、もめ事が起きたのだ。そして統治者どうしが撃ちあえばよいものを、それはしないで、なんと狡猾にも、この哀れな村人たちに撃ち合いをさせたのだ。(第二巻第八章)

後にこの同じ考えが十九世紀のもう一人の文人ジョン・ラスキンによって引き継がれ、一段と敷衍した形で論じられ

ることになる。それはラスキンが一八六五年（カーライルの著書から約三十年後）王立兵学校の若い将校たちの前で行った講演である。しかし驚いたことに、彼は平和思想を述べる前に、戦争の価値を賞賛することから話を始める。

戦争はすべての芸術の基盤であると言うとき、私は同時に、戦争が人間のすべての気高い美德と能力の基盤であるということの意味しています。この事実に気がついたとき、私は奇妙な気がしましたし、また恐ろしいと思いました。でもそれが否定しがたい事実だと思つたわけです。……〈中略〉……要するに、すべて偉大な国民は力強い言葉と力強い思想を戦争の中で学んだのです。戦争によって育まれ、平和によって墮落させられたのです。戦争によって教えられ、平和によって欺かれた、戦争によって鍛えられ、平和によって裏切られたのです。一言で言えば、偉大な国民は戦争の中から生まれ、平和の中で朽ちていった、このことに気がついたのです。<sup>(註13)</sup>

彼は、講演を聴いている兵士たちへの単なるリップサービスとしてこのようなことを言つたのではない。彼は以前からこの兵学校で講演をしてほしいと依頼されていたが、戦争をしようという若者たちがどうやって美術評論家の話などに関心を持つてくれるだろうかと思ひ、躊躇していた。そんなときに、彼は戦争と芸術の間にある、奇妙な関係に気がついた。それはまた恐るべき事実であつた。もし人類が戦争というものをしなかつたなら、たとえば文学などは、その題材の半分以上を失つていただろう！偉大な文学の半分以上は存在していなかつただろう！かくしてラスキンの講演はあたかも戦争を礼賛するような調子で始まる。しかし恐ろしい戦争を描いた偉大な文学の永遠のメッセーヂが平和と和解であつたように、ラスキンの意図も、カーライルの思想の継承、すなわち、一切の戦争を激しい口調

で否定する反戦思想・平和思想を説くところにあつた。ラスキンはこの講演の中心部で、上に引用したカーライルの一節をそっくり引用している。<sup>(注1)</sup>そして講演全体が、カーライルの反戦思想の敷衍になつてゐるのである。

そしてこの同じ思想を（ラスキンから約三十年後に）継承した第三の人が新渡戸である。彼は『武士道』（一八九九年執筆）の第一章の脚注でラスキンの上の一節を引用し、そこから武士道の倫理の考察をスタートさせてゐる。ラスキンが芸術について言つたのと同じように、武士道もまた戦争の中から生まれ、そして平和をを目指すのだと、『武士道』の第十三章で、新渡戸が、日本刀は恐るべき武器ではあるが、その最善の用途は、使わないこと、むやみに振り回さないことだと述べてゐるのを思い出せばよい。逆説的ではあるが、しかし事実として、新渡戸が説いた武士道は、彼のクエーカー教徒としての平和思想と調和し共存するものだったのである。<sup>(注15)</sup>

このような逆説や矛盾はとりわけ文学には多く見受けられる。それはおそらく、文学はすべての人間の知的営為の中で、実人生の経験に最も近いところに位置するからに違ひない。他の知的作業が、実人生の経験的事実を抽象して理論体系にまとめようとするのに対して、文学は経験の中身を逆に深化させ増幅しようとする。その結果、それはしばしば実人生の真理を帯びた逆説として迫ってくる。新渡戸は最晩年の昼食会（東京パンパシフィック倶楽部）のスピーチで、自分のことを、自己矛盾し一貫性を欠いた人間だと言つた。それは卑下でも何でもない、まさに文学を愛した彼の人となりだつた。文学を愛する者として、彼の平和と愛に対する信念は心に深く根付いた感情であつたのである、これによつて、彼は真の連盟人になり得たのである。

「ナシヨナリズムとインターナシヨナリズムは同じものだ」という、新渡戸が繰り返し述べる発言もそうした矛盾・逆説の一環と考えてよいかもしれない。ここで重要なのは、新渡戸の厳密な用語の定義である。彼の定義で、national-

ism と patriotism は同意語として扱われる。しかしその二つは chauvinism や jingoism と鋭く対立する。前者の特徴は、自国を愛するところにある、後者は自国の敵を憎むところにある。結局同じことになるのではないかと思えるかもしれないが、力点の違いが大きな違いを生み出す。両者は異なるだけでなく、正反対のものだと新渡戸は言う。そしてそのように定義された nationalism もしくは patriotism は、internationalism と同じものだと言う。この internationalism の方も、それと似通った cosmopolitanism と区別される。cosmopolitanism はすべての国の違いを消去しようとする。一切の国民的感情や愛国心を一掃し世界を一つにしようとする。新渡戸は internationalism を支持し、cosmopolitanism には与しない。そのように定義された inter-nationalism は世界の各国の nationalism と patriotism をその前提においている。自国を愛する人は、同じような愛国心に支えられた国々がつくる全世界を必然的に愛するであろう。そして世界を愛する者は、世界の中でもっとも身近にある大切なものとして自国を愛さずにはいられない。

このような厳密な用語の定義は、カーライルの先駆者と言われるサミュエル・テイラー・コウルリッジの方法を思い出させる。我々の議論はしばしば曖昧な言葉の使用によって論点がわからなくなる。これを克服する方法として、彼は desynonymization (同意語の分離) という方法を用いた。同意語として使われてきた言葉を厳しく分けて使うというもので、もっとも有名な区別は fancy と imagination の区別である。そのほか talent/genius, allegorical/symbolical, delirium/mania, fanaticism/enthusiasm, delusion/illusion, invent/discover, division/distinction, reputation/fame などの区別を行い、これによって議論を明晰にしようとした。<sup>(注16)</sup>新渡戸は nationalism 対 chauvinism、internationalism 対 cosmopolitanism といった用語について、同じことをしている。

ナショナリズムや愛国心という言葉には、始末の悪い曖昧さがあることは誰も否定しないであろう。日本において

新渡戸の評価を損ねたものは大部分、この、言葉の曖昧さであった。新渡戸はナショナリストであり愛国者であった。そのことを新渡戸自身が認めたであろう。しかし彼がそう言うとき、それは彼が厳密に定義した意味でのナショナルリストであり愛国者であった。にもかかわらず、新渡戸の死後の世代は新渡戸の意図を正しく理解しなかった。一九三五年に皇訓成美會という団体が『武士道』の邦訳を出した。これは愛国的な教育団体だったようであるが、そのときの「愛国的」は、新渡戸の定義で言う patriotism でなく、chauvinism に属するものだったのではないかと思われる。国家の敵を憎むことによって国家に忠誠を尽くせ、と。この本は『武士道』の邦訳のほか、各地を行幸する天皇の写真や、政府の高官による訓辞、枢密顧問石井菊次郎の「武士道と北条時宗」と題したエッセイを載せている。『武士道』を訳したのはその教育団体の理事、近藤晴郷という人である。この訳者がどれだけ西洋の文化に通じていたかは、その翻訳の冒頭のところで明らかである。「英国のエドモンド・バークは、欧州にあつてもこの武士道が、久しい以前から捨て顧みられなくなっているのを嘆いて、哀しい一篇の詩を作つて、その柩を弔うていますが、著者はここに、氏の母国語でもつて、此問題を攻究する事は、洵に欣快だと思ふものであります。」(傍線付加)バークの『フランス革命についての省察』が詩歌だと言うのは、読んでいないと言ふのと同じである。(注1)

武士道という言葉は新渡戸の死後にとりわけはやつたように見える。一九四一年(昭和十六年)軍国主義の風潮が国全体を席卷していた頃に、武士道學會編『武士道の神髓』(帝国書籍協会)が出版されている。新渡戸の著書とは直接関係はない。「戦陣訓」を巻頭に飾り「軍人勅諭」でしめくくられた論文集であるが、その「戦陣訓」の前に掲げられた「序」で、新渡戸の名をあげている。「曾て日露戦争に連戦連勝した我が日本に対して、諸外国の識者が等しくその因由をいぶかった時、わが新渡戸稲造博士は、英文にて『武士道』なる一卷を著して、その疑問を解いたのであつ

た。わが武士道こそは、実にわが国運発展の原動力であり、今後愈々重大を加える世界史的興亜の大業の根本動力でなければならぬ。<sup>(注18)</sup>」

上の二つの事例のどちらにおいても、新渡戸の名前と本の題名が、軍国主義的目的に利用されているのがわかる。言い換えると、新渡戸のナショナリズムないし愛国心が、彼が定義する意味ではその正反対になる chauvinism ないし jingoism (つまり軍国主義) に属するものとして扱われているのである。そして戦後になって、国民全体が、戦前・戦中の軍国主義を不快の念をもつて振り返るようになると、今度は逆の形で、新渡戸の名声は再度、被害を受けることになる。新渡戸のナショナリズムが戦中の軍国主義と混同され、その誤解に基づいて批判された。新渡戸が、nationalism と chauvinism は正反対であるとか、また、子供たちに向かって敵国を憎めと教える教育ほど恐ろしいものはないというような発言を、何度も繰り返していたことを考えると、不思議である。これらの発言が、新渡戸の場合、主として英語でなされていて、一般の日本人に届かなかつたのが原因かもしれない。いずれにしても、新渡戸についての誤解は、曖昧な言葉の使用によって生じたと言つてよい。すべての英文著作に日本語訳をつけた新渡戸全集が二十世紀後半に出版され、それらの誤解を払拭したと言えなくもないが、それでもいったん生じた誤解は、すぐには消えない。一九八一年飯沼二郎『毎日新聞』夕刊記事、また新渡戸の平和主義と国際主義に疑問を投げかけた太田雄三著『へ太平洋の橋』としての新渡戸稲造』などに、跡を残している。<sup>(注19)</sup>

同じような誤解によって、時に新渡戸は帝国主義者と断じられたりする。新渡戸が連盟のスポークスマンとして、高らかに次のような発言をしているときに、どうしてそのようなことが言えるのであろう。「ベルサイユ条約は帝国主義の終焉を宣言したものです。帝国主義は死なないという者もいます。確かに残念なことにはまだ存在すると言わざ

るを得ません。しかし、いまだ葬り去られていないとはいえず、連盟規約は帝国主義に致命的な打撃を加えたのです。これ以後、開化した国際社会において、帝国主義者が許容されることはないのです。後進諸国民が帝国主義の犠牲となつて搾取されることはもはやなくなるでしよう。<sup>(註20)</sup>

新渡戸のナシヨナリズムを考えると、用語の定義に気をつける必要がある。すでに述べたように、新渡戸の定義においてそれは chauvinism あるいは jingoism (すなわち軍国主義) と正反対のものであり、インターナシヨナリズムと同一である。少なくともそれが新渡戸の理想であつた。どの程度まで新渡戸が現実の言動において、この理想に忠実であつたかは、様々な歴史的、政治的問題との関連で検証されねばならず、それはかなり複雑なものになるであろう。しかしどのような判定が下されるにしても、一つ確かなことは、もし仮に新渡戸の言動のどこかに、その理想から外れるように見えるところがあつたとしたら、その責めは彼自身でなく、彼が信じてやまなかつた「ナシヨナリズムとインターナシヨナリズムの共存」を不可能にしてしまうような、時代状況にあつたということである。新渡戸は最後まで彼の理想に忠実であり、世界をつなぐ橋としての使命を全うした。そして、第二次大戦へと突入していく国際紛争の時代に、蔓延する国家主義的エゴイズムによって、橋が無惨にも崩壊していく、その犠牲者として倒れたのだと私は考える。

注

- (1) 『新渡戸稲造全集』(以下『全集』)第二十三卷三七五―七六頁。  
 (2) 本稿は、カナダ・ビクトリア市で開催されたカナダ日本研究学会第十八回大会(二〇〇四年十月十五日)において口頭発表したも

のである。

(3) 新渡戸は、北海道大学の前身札幌農学校で学んだ。札幌農学校は政府が当時相当の予算を投じてお雇い外国人教師を招いて開校した。英語が出世の鍵と見なされた時代に、講義がすべて英語で行われる学校であったこと、また、武士階級が禄を失った時代に、学費や生活費が官費支給であったこと、この二つが大きな魅力となって、当初の数年間、主として東京の学校から、貧しくとも優秀で大志を抱く青少年を多く引き抜くことになった。一種の頭脳流出であった。政府の意図はロシアの脅威に対抗すべく北海道を開拓する技術者を養成することであったが、赴任した外国人教師たちは、キリスト教的教養教育に力点をおいた。この結果、発足当時の札幌農学校からは、開拓の技術者ではなく、近代日本の知的開拓者が輩出することとなった。

(4) 例えば、一九三八年の矢内原訳以来今に至るまで、『武士道』の日本語訳に恒常的なあやまちが見られる。すなわち、第九章にあるトーマス・モウブレイが、第八章にあるノーフォークと同一人物で、シェークスピア『リチャード二世』の登場人物だとわかっていない。その結果、十三、四世紀の詩人だという注までつけている。よい例が思い浮かばないが、『忠臣蔵』で内蔵助と言ったり大石良雄と言ったりするようなものである。コンテクストによって使い分けたいときもあるであろう。明治四十一年の桜井鷗村の流麗な訳がそもそもの原因だったかもしれない。たしかにその一節は倒置が多く、活字だとわかりにくい、身振りや抑揚をつけて朗唱されればよくわかるという芝居の台詞の特徴を持っている。文語調をもう少しおさえるべきだったのかもしれない。いずれにしても十三世紀や十四世紀の詩人はこんな近代的な英語は使わなかった。

(5) 『全集』第十五卷三七一—四〇〇頁。

(6) 『全集』第二十三卷三七三—七九頁。

(7) 後述の著書(注9参照)で阿川尚之は、このあたりの新渡戸の英語の原文が「変である」と言っている(二五六頁)。確かにそれだけを見ればぎこちないと言えなくもないが、しかしそれは引喩(本歌取り)であるがゆえのぎこちなさなのである。

(8) 新渡戸が連盟の事務局において中心的な役割を果たすことになった原因はほかにいくつか考えられる。一つには、アメリカが加入をやめ、ロシアとドイツが排除された国際連盟は、ヨーロッパの戦後処理という性格をもった。そのようななかで、自国の権益に縛られない新渡戸は連盟の理念をもつともよく理解し実践できる立場にあった。また新渡戸自身が早稲田大学での講演で言ったことであるが、ジュネーブと出身国の距離も無視できない。新渡戸は事務次長就任中一度だけ日本に帰国した。それも事務局の仕事がスタート

してから五年後のことであつた。ほかの次長や事務局の高官が、出身国が近いため、自国の用事で呼び出され、ジュネーブを留守することが多かったときに、新渡戸は常に事務局にいて、緊急の事態に対処することが多かった。さらに、総長のドラモンドが外交官としての実務能力にすぐれていても、人生経験や学識の点で、十四歳年上の新渡戸に及ばなかつたこともある。

(9) 最近、新渡戸の英語力を賞賛する二冊の本が出版された。斎藤兆史著『英語達人列伝』（中央公論新社二〇〇〇年）と阿川尚之著『アメリカが見つかりましたか——戦前篇』（図書出版一九九八年）である。だが私には彼らの力点が英語の技術面だけにおかれてしまつているように思われる。例えば、前者は、新渡戸が十七歳の時にカーライルの難解な一節を理解できたその英語力に感嘆しているが、しかしカーライルの思想を理解し得たのは単に英語力だけではできないことだつた。英語力以上に、それと相即不離ではあるが、思考力が伴わなくてはならないことであつた。また後者は、新渡戸が英語を自由に使いこなしたのはアメリカ人女性と結婚したためだろうという、安易な推測を述べている。確かにメアリーは新渡戸の人生において重要な役割を果たした（ジョージ・オーシロ著、長尾輝彦訳『もう一人のかけ橋——新渡戸稲造夫人メアリーの生涯』（私家版参照）。しかし結婚に関してであれば、事實はその逆である。新渡戸の英語力と西洋文化についての深い学識が、メアリーに感銘を与え、彼女をして新渡戸と人生をともにする決意をさせたのである。

(10) 新渡戸は一九〇七年頃の回想（『全集』第五卷一五六頁）で、このアメリカの雑誌を『インディペンデント』と言っている。しかし *Poole's Index to Periodical Literature 1892-1906* を参照すると、『インディペンデント』は一八九二年から九六年まで刊行されたとあり、新渡戸の農学校学生時代にはまだでていなかったことになる。これに対して、*Harper's New Monthly Magazine* (New York: Harper & Bros., 1850-1899) は、一八五〇年から一八九九年まで刊行されており、新渡戸の学生時代をカバーしている。なお北海道大学図書館での雑誌の検索に際しては、同僚の瀬名波栄潤氏から貴重なご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

(11) この一節は、一九二八年頃の新渡戸の回想（『全集』第一卷一八四頁）之を見ると我輩の心の有様を写真にとつた如く云ひ現はしてある。シテ見ると我輩と憂を同ふせるものが世にあるものだ、あるどころでなく、恐らく此心を懐かぬものはなからうとまで思ふ）によく符合する。また、『インディペンデント』の名をあげた上述の回想（注10参照「其中にカーライルの云つた句が引用されてあつて、如何にも面白く感じた。コンナえらい思想があるものかと思ひ、それから斯人の書物を読みたく思つた」）にも符合している。

(12) ミル『自伝』第五章。

(13) ラスキーン『野のオリーブの冠』第三講「戦争」第九四節。

(14) ラスキンの『野のオリーブの冠』第三講「戦争」第九九節。

(15) 太田雄三著『太平洋の橋』としての新渡戸稲造(みずが書房一九八六年)は、このラスキンの引用を問題視して次のように言う。「新渡戸は日本における先駆的な平和主義、民主主義、自由主義の唱道者のように言われることがある。しかし、『武士道』の中の次のような言葉は、例えば、他人の口を借りているとは言え、ほとんど戦争賛美ではないか。……(ラスキンの引用略)……こんな個々の言葉だけでなく、戦争をすることをその究極的存在理由とした武士階級の価値観と彼が信じたものを弁護した書である『武士道』全体の思想が平和主義とは無縁である」(七九—八〇頁)。しかしながら、ラスキンの論調は逆説でありアイロニーである。一見戦争賛美と見えるものからスタートするが、真の意図はすべての戦争を非として弾劾するところであり、そのことは、ラスキンのこのかなり長いエッセイを最後まで読めば誰の目にも明らかである。著者はラスキンのアイロニーに気がつかなかったか、もしくは新渡戸が引用したこの一節だけでラスキンを判断したのと思われる。しかるに新渡戸がラスキンのエッセイを最後までむさばるように読んであることは想像に難くないのである。新渡戸がバークの『フランス革命についての省察』からスタートしているのもこの点で意味深い。バークは西洋の騎士道精神に訴えて、フランス革命の野蛮な行為を批判する。騎士道も武士道も「戦い」の中から生まれた倫理でありながら、その目指すところは野蛮さを排し、平和と愛を目指すのである。

カーライルとラスキンの反戦思想は、とりわけ一般人が犠牲となる近代戦争の残酷さに力点をおいたが、それはたしかに新渡戸の反戦思想に継承されている。そのような反戦思想は、経験の差というべきか、イギリスにおいて、日本よりはるかに進んだものがあつた。連盟の仕事を終えて帰国した新渡戸は、その経験をふまえて次のように日本人に警告していた。一九二八年のことである。それを読むと新渡戸の反戦・平和思想はただの理想論ではなかつたことを、改めて痛感させられる。「西洋において」一般の世界戦争の時、封鎖が行はれ、敵も味方も食糧の供給に苦んだ。寧ろ戦員はそれほど欠乏を感じなかつたらうが、内にあつて家を守る老弱婦女子が最も食糧の不足の為に苦んだ。それに近來は毒瓦斯使用の為に(一定の年齢以下或は以上の者、或は婦女子のみには無害なる瓦斯が発明せられざる限り)何人も戦線にあるものと同じ取扱を受けることになつた。国民皆兵は文字通りの意味となつた。是に於て戦争防止の叫が男女の区別なく、又如何なる階級に於ても声高々と聞ゆるに至つた。日本人は聯盟軍に参加したとは云へ、實際戦争の害を蒙らず、却て全国挙げて成金となつたから、戦争の苦さを味はなかつた。けれども英や仏——白耳義は勿論——では何時敵の飛行機が襲来するか計られないから、四年間婦女子はろくろく寝衣に着替へることすら躊躇した。のみならず男子は出征して国内の労働が不足した

為め、有ゆる階級の婦人達は軍需品その他の製造に従事した。労働の苦も、敵来襲の怖しさをも弁じ得ざる小児さへ、食糧欠乏は体験せざるを得ないから、戦争の残忍なるを強く覚えた。我邦人は維新の際随分内乱に逢ふて、その残酷さ加減を目撃したのであるが、現代の人々はただ戦役は致富栄達の道たるのみを知る如くである。故に邦人間にはどれ程まで西洋に於て平和を希望するの念の深きかを量り得ぬ懼がある。『全集』第一巻三三三—三四。

(16) Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literaria*, ed. by James Engell and W. Jackson Bate (London: Routledge & Kegan Paul, 1983), Vol. 1: 82-85.

(17) 『邦文武士道』(附)武士道と北条時宗(農学博士・法学博士新渡戸稲造著、枢密顧問官・子爵石井菊次郎著、皇訓成美會・理事近藤晴郷譯、慶文堂書店(広告欄『日の丸教育美談』)。

(18) 武士道學會編『武士道の神髓』(帝國書籍協会)。一体に、新渡戸の著書は『武士道——日本の魂』と題して邦訳されると「尊皇攘夷」型の愛国者を感動させるところがあるが、自身が本当に読まれているのかどうか疑わしい。太田雄三著『太平洋の橋』としての新渡戸稲造が指摘したように、新渡戸の著書は日本紹介の書としては不正確な点がある。そこに書かれた日本及び日本史の知識は専門家のそれではない。その上それは西洋の文化が好きでたまらないという人が書いた本である。愛国主義と国際主義がミックスしているのである。尊皇攘夷型の人を満足させるようなことが書かれているわけがない。新渡戸の書の不朽の価値は、西洋の文化に初めて触れた明治の日本人の心の記録、換言するなら、キツプリングの言う「東と西」の出会いが、西洋の文学・思想に裏付けられた美しい英文でつづられているという点にある。

(19) 一九八一年八月十六日『毎日新聞夕刊』「新渡戸稲造は自由主義者か」。太田雄三著書については前注(15)参照。

(20) 『全集』第十五卷三九三頁。